

C1:男子体操競技

男子審判長 近藤昌夫

令和3年度全国高等学校体操競技選手権大会は、8月9日～8月11日に新潟県上越市リージョンプラザ上越において開催されました。コロナの影響で昨年実施できなかったこの大会も、無観客である上に選手同士での声援の制限など感染対策が多くありましたが、それでも高校生の元気溼刺とした姿が相変わらず見られたことは実施の意義があったと思われまふ。会場練習から猛暑が続き会場内の気温も上がり、演技するにはかなりの集中力や調整が必要であったでしょうが、熱中症や大きな怪我で運ばれる選手が出なかったことに安堵しています。また、入力機器のトラブルで進行が遅れた部分もありますが、選手の協力はもちろん、審判の方には迅速な採点を行なっただき、なおかつ昼休みの時間を短縮するなど大きな遅れにならなかったことに感謝いたします。

団体決勝は清風高校が優勝となりました。開始種目から最終種目にいたるまで安定した試合展開で、難度の高い技を取り入れながら、実施減点をできるだけ抑えてEスコアを高める戦いでありました。各種目の終末技において着地を止めにくいとする気迫が会場全体に伝わってきました。

個人総合では、川上翔平選手(清風)が84.25を獲得して優勝しました。第2位には谷田雅治選手(作新学院)が82.95、第3位には岡慎之助選手(星槎国際)が81.95のスコアでメダルに輝きました。

団体予選通過16位の得点は217.45、17位が217.20で18位が216.55でした。一昨年よりもボーダラインが2点ほど上がりましたが、1点以内の差に3チームが接戦という厳しい争いになりました。

競技は2017年版採点規則および平成29年度版高等学校男子適用規則と男子体操競技情報29号追加情報までを採用しました。オリンピックの1年延期を受け、この規則も5年目になりました。現場の選手や監督の皆様にはかなり浸透され、どのような演技構成が高得点を得られるかも想定されているように感じました。確かにDスコアに関しては全体的に向上しているように思えますが、Eスコアに関してはDスコアほど上がっているように感じませんでした。それは各種目で規定されている姿勢の曖昧さからくるのではないかと本部席から見えました。伸身姿勢を要求されている技が腰まがりにより小欠点や中欠点を受けている、もしくは屈身と判断されても仕方がないような演技が競技力のレベルに関わらず散見しました。姿勢の良い選手が結果的に良い点数を得ていたことは言うまでもありません。姿勢についての定義は採点規則最終章「補足」に説明がありますので、今一度確認されることを願います。加えて、次年度は新ルールの採用になりますので、正しい情報を早めに収集され、春からの大会に望んでいかれますようお願いいたします。

最後になりますが、大会実行員会、高体連関係役員、新潟県体操協会や補助役員、その他大会に携われました多くの皆様のお陰により素晴らしい大会となりましたこと、心より感謝申し上げます。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2017年版採点規則、情報29号および平成25年度版高等学校男子適用規則(2017年改訂版)の確認
- ・技の認定、実施に際してはルールに則り厳密に採点する。
- ・ニュートラルディダクションの確認。(2回宙返り技、全てのコーナーの使用、ライン、計時、技不足)
- ・減点が少なく、かつ雄大で美しさが求められた実施を評価する。
 - *安定した演技実施を基盤に、高められたDスコアを有する演技。
 - *美しさ、力強さを表現した演技実施。
 - *着地への準備局面を有し、高い姿勢で意識的に止められた着地。
 - *雄大なタンブリングや正確なひねり技による先取りのある安定した着地。
- ・グループIの旋回技や力静止技において丁寧で美しさを表現する演技の評価。
 - *静止が求められる技においては厳密に判定する。
- ・ひねりを伴った宙返りの連続では、明確なひねりの終了を示して次の宙返りに連続すること。
- ・コーナーへの単純なステップや移動。
- ・将来性の認められる演技に対する評価についても着目する。

2. 競技会での技の実施や認定に関する事項

- ・前方伸身宙返りひねりで、明確な伸身局面が見られない実施や技の前半から膝のまがりが見られた実施はA難度と判定した。
- ・宙返りの連続において、2つ目の技で大過失と判定した場合は組み合わせ加点なしとした。
- ・ひねり不足については厳密に判定し、90°以上の不足の場合は低い難度で認定した。また、そのため繰り返しとなり不認定となる実施があった。
- ・静止技において、明らかに静止が見られない実施は、不認定とした。また、そのためグループIがなしとなるケースがあった。
- ・2回宙返りなしによるND0.1となった演技は予選で84演技、決勝で10演技あった。

3. その他特記事項・意見・感想等

決勝においてDスコアの最高は6.4点、Eスコアの最高は8.65点であった。終末技において着地の止まった判定をした演技は、18演技あった。着地をしっかりと決めてくる演技もある一方、着地時のゆか面のバネに合わず跳ね返りのある着地が散見された。宙返り連続技においては、組合せ加点0.2となるD+Dを構成した演技が4演技、D+Eを構成した演技が1演技あった。2回宙返り技においては、E難度の2回宙返り技が入った演技が23演技、D難度以上の2回宙返り技が2技入った演技が4演技あった。

Eスコアにおいては、予選、決勝とも全体を通して、一つ一つの着地が高い姿勢で安定された演技が高い得点を獲得している。空中局面における脚の開きや姿勢欠点、宙返り連続技の1回目の宙返り技の高さやひねり不足、着地等が主な減点となった。また、静止技の静止時間の不足が散見された。十字倒立の肩の角度の高い実施が多く見られた。E難度の単独の2回宙返り技も増えており、より着地を重視した演技が多くあったように感じた。序列の上で着地の取り方、着地の姿勢がポイントとなっている。着地後に止まったことを表現する捌き、演技全体として減点がなく、かつ雄大さと美しさを持った演技が求められる。

最後に、長引くコロナ渦で普段の練習にも影響が出ていることと思われるが、怪我には十分注意をし、これからも練習に励んでいただきたい。

1. 採点上の打ち合わせ事項

採点規則・競技規則について

平成 25 年度版高等学校男子適用規則（2017 年改訂版）および情報 29 号の確認

- ・終末技 A 難度には+0.1, B 難度には+0.2
- ・終末技として認められない場合は、やり直しを認める。
- ・倒立下りにおいて馬体をかけた場合や足先が馬体より下がった場合以外は難度を認定する。ただし、相応の実施減点がかせられる。

D スコアについて

- ・交差倒立について、足先が戻ったり（手首を超える）、両手が馬端に落下しなければ難度とグループを認定する。
- ・グループ II, III の技は、採点規則上にあるグループ II, III の技につなげなければ不認定とする。
- ・倒立下りについて、難度を上げるためひねった場合、コントロールされたひねりでなければ 1 つ下の難度を与える。

E スコアについて

- ・倒立になる技（グループ I, II, IV）で力を使った場合は減点の対象となる。
- ・縦向き旋回の角度の逸脱は減点対象である。
- ・旋回の腰の引きは減点の対象である。
- ・片足振動技は難度としてカウントしない運動でも小さければ減点の対象である。

2. 競技会での技の実施や認定に関する事項

- ・交差倒立で手首を超えて振れ戻った実施は不認定とした。
- ・グループ II, III の技の次に技につなげることができなかった（つなげなかった）実施は不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会の決勝 85 名の D スコアを見ると 5.0 以上の構成で組んできたのは 13 名で一番多く組まれたのは 4.7~4.8 で 14 名であった。今大会を通して、いつも言われる事ではあるが縦向き旋回の角度、マジヤール移動やシバド移動（開脚旋回も含む）などの高難度の技だけではなく単独の縦向き旋回（A 難度）でも減点されることを意識してもらいたい。交差倒立の持ち込み方はまだまだ改善の必要がある実施が多かった。今大会非常に気になったのが、技としてカウントしない片足振動技の実施であった。交差技に持ち込む際に行われる片足の抜きや入れの動作、交差技は大きく実施しようとするがその前の運動を小さく実施するため減点されている演技が多くあった。再確認していただきたい。

1. 採点研修での確認事項

採点規則・競技規則について

平成 25 年度版高等学校男子適用規則(2017 年改訂版) および情報 29 号の確認。

- ・ D 難度以上の力静止技（グループⅡおよびⅢ）に対して、1 技につき 0.1 の加点を D スコアに行う。
- ・ 終末技の着地をとめた場合、E 審判によって 0.1 の加点を与える。

D スコアについて

- ・ ほん転逆上がり倒立（後方車輪倒立）及び、後ろ振り上がり倒立（前方車輪倒立）において、屈腕の実施であっても難度とグループを認定する。
- ・ 後ろ振り上がり開脚水平支持において、腰のまがり明らかに 90° を超える逸脱がある場合は不認定とする。

E スコアについて

- ・ 静止技の時間については、単純な技も含めて厳密に得点に反映させる。
- ・ 十字懸垂から逆懸垂に姿勢を変える際や、後ろ振り上がり支持、け上がり支持での腕のまがりについては規則に則った減点をする。

2. 競技会での技の実施や認定に関する事項

- ・ 後ろ振り上がり開脚水平支持において、脚の下がり明らかに 90° を超えて逸脱した実施は総合的に判断をし、不認定とした実施も複数あった。
- ・ け上がり十字懸垂、後ろ振り上がり十字懸垂の両方を実施した演技があったが、特別な繰り返しにより一方のみ認定した。
- ・ グループⅡ、Ⅲの連続規制に抵触する演技が複数あった。
- ・ 後方車輪倒立で背中側へ倒れ、後ろ振り上がり等で演技を続行、再度後方車輪倒立を実施したが、繰り返しにより不認定とした。
- ・ ヤマワキを試みたが途中明らかな支持があり不認定となった。そのまま演技を続行し、再度ヤマワキを実施したが繰り返しにより不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

上位レベルの中水平支持については、高さ、角度、姿勢等について質的な向上を感じた。一方で倒立静止において終始ロープに腕が触れている実施が多いと感じた。伸腕屈身力倒立（シンピ倒立）を実施する際に、輪が内転し腕がロープにもたれかかる演技も多い為、改善が望まれる。

静止時間については、輪の揺れに合わせようとするあまり、静止時間が不足している実施が散見された。もうひと揺れ待てる余力を身に付けて欲しい。また、失敗等が原因で意図せずに発生した脚前拳支持においても静止時間の減点は有り得るので、倒立で前に倒れてしまった後の振り上がり支持～脚前拳支持でも焦ることなく演技をする事が望まれる。

「支持後ろ振り、前に回りながら懸垂支持後ろ振り」において、腰を吊り上げながら屈身で支持を経過する捌きは相応しくないと感じる。後ろ振りである以上、身体が伸びた状態で振り上げ局面を実施する必要がある。

後ろ振り上がり支持において、腕を伸ばした実施を意識している演技が増え、良い傾向だと感じた。大きさも減点されない水平位を目指して更なる向上を期待する。

後方伸身 2 回宙返り下りにおいて、輪を持っている時間が極端に長い実施があった。過度な場合は不認定となり終末技も認められないため、演技に組み込むのかを慎重に判断することが望まれる。また、単純な部分ではあるが、逆懸垂で 2 秒以上の静止があり減点をした演技が散見された。同一演技内で複数回の減点をした実施もあるので、余分な減点が発生しないように注意を払う必要がある。

1. 採点研修での確認事項

採点規則・競技規則について

- ・平成25年度版高等学校男子適用規則(2017年改訂版)および情報29号の確認。
- ・着地をとめた場合、E審判によって0.1の加点を与える。

Dスコアについて

- ・足からの着地が見られない等、0点となる実施の確認。

Eスコアについて

- ・美しさ・雄大性のある跳躍の評価。
- ・第一局面での脚の開きや膝のまがりに対する減点。
- ・着手時における垂直面からのはずれに対する技術欠点。
- ・着手時におけるグループIとIIの判定が困難な実施に対する技術欠点。
- ・第二局面での高さ(大きさ)不足や姿勢に対する減点。
- ・準備されていない着地に対する減点。
- ・低い着地姿勢に対する減点。

2. 競技会での技の実施や認定に関する事項

- ・何らかの原因で身体をコントロール出来なくなり、意図した跳越技が実施できず、膝のまがりが見られた跳躍は、かかえ込みのツカハラひねりやカサマツひねりと判断した。

3. その他特記事項・意見・感想等

決勝では86%の選手がグループIIの跳越技を実施した。割合は3月に行われた選抜大会と同じであった。演技者数(今大会84名、選抜大会72名)に差はあるが、アカピアンを35名(選抜大会21名)、ドリッグスを16名(選抜大会8名)が実施するなど、多くの選手が春から夏にかけてのDスコアアップに取り組んできたことがうかがえた。また、選抜大会では5.6以上の跳越技を実施する選手はいなかったが、今大会では1名がロペスを実施した。

Eスコアに目を向けると、第一局面における脚の開きなどの姿勢欠点を減らそうと努力している選手が多かったように感じられる。また、近年、着地姿勢の高さを意識した選手が増えており、今大会も素晴らしい実施を披露した選手が数名いたことは良い傾向であると感じた。

一方、高さ(大きさ)のある跳越技を実施する選手は少なかつたため寂しさを感じた。高さに余裕がないことも影響しているのか、第二局面における姿勢に対して減点される選手が多かつた。膝や足首のまがりだけでなく、腰をまげる実施もあつた。また、ひねりのきつかけを作るために、着手時に身体を垂直面からはずす実施が散見された。身体を垂直面からはずす技術は、跳馬特有の減点項目に記載されているだけでなく、高さ(大きさ)のある跳躍につながりにくいため推奨し難い。

着地に関して、安定した実施を期待していたが、不安定な実施が多かつた。ライン減点は予選で29.5%、決勝で28.2%、着地における転倒(転倒相当)は予選で8.0%、決勝で5.9%あつた。ラインを越えるということは着手時に何らかの技術的な欠点があることが考えられるため、着地以外の減点が追加される可能性がある。

脚の開きや垂直面からのはずれなどに対する見え方は、審判の座っている位置で多少異なるかもしれないが、誰からも、どの位置から見ても評価される跳越技を実施した選手は高い得点を得ることができる。より高い評価を得るためにも、美しさ・雄大性に加え、安定した演技実施を目指してほしい。

1. 採点研修での確認事項

採点規則・競技規則について

平成 25 年度版高等学校男子適用規則(2017 年改訂版) および情報 29 号の確認。

- ・ウォーミングアップは団体に対して 200 秒、個人に対して 50 秒が与えられ、団体はタイマー表示、個人は口頭で伝える。

D スコアについて

- ・静止技において静止がみられない実施は不認定となる。
- ・実施された技がコントロールされずに不完全な実施であった場合は落下の有無に関わらず不認定となる。
- ・支持や倒立で完了する技において、支持や倒立局面で大きく屈腕になる実施は不認定となる。

E スコアについて

- ・「前振り上がり」や「け上がり」、「モイ」については大きさを求め、支持の際に腰が下がるものは減点の対象となる。
- ・終末局面が倒立位の技においての角度逸脱による減点は厳密に行う。
- ・「後ろ振り倒立」は振動を有効に使い、伸身姿勢を保って倒立まで持ち込まなければならない。「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」や「ヒーリー」などの後に力を使ったり、腰をまげたりして倒立に持ち込む姿勢は減点の対象となる。
- ・静止技における静止時間については厳密に判定する。静止時間が短い、または静止がみられない実施は相応の減点の対象となる。

2. 競技会での技の実施や認定に関する事項

- ・「ヒーリー」や「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」において大きく肘のまがった実施は不認定とした。
- ・「チップルト」において、脚がバー上にとった実施や停滞が見られたりした実施、脚が途中で下がった実施は不認定とした。
- ・「ディアミドフ」において、倒立でコントロールされずに腕支持で完了したものは不認定とした。
- ・「後ろ振り倒立」や「伸腕屈身開脚力倒立」において静止がみられない実施は不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会を通して、静止技における静止時間の不足が実施した多くの選手にみられた。平行棒における主な静止技は「脚前挙」「伸腕屈身開脚力倒立」「後ろ振り倒立」であるが、2秒に満たない実施(-0.3)または静止が見られない実施(-0.5)が散見された。また、その他の減点として倒立技の角度逸脱等、不安定な技の実施が見られた。平行棒の技の多くは倒立で完了するものであり、その一つ一つの倒立の収まり具合が E スコアに多大な影響を与える。ひとたびバランスを崩すと倒立での角度逸脱、姿勢不良、肘のまがり、手のずらしなど、一つの技で複数の減点を被ることが想定されるため、注意が必要である。

今後も正確な技捌きと倒立の強化に重点を置き、さらなるトレーニングに励んでいただきたいと感じた。また、例年、前の演技者が着地するやいなや次の選手がマットに上がって準備をするといった場面が多く見られたが、残念ながら今大会においてもいくつかの学校が同様のことをしていた。着地後にポーズをして審判に挨拶をするまでが演技であるということを再度認識していただき、前の選手の演技を尊重する意味も含めて、前の選手の演技終了を待って次の選手がマットに上がるよう、指導していただきたいと感じた。

1. 採点研修での確認事項

採点規則・競技規則について

平成 25 年度版高等学校男子適用規則(2017 年改訂版) および情報 29 号の確認。

- ・終末技の着地をとめた場合、E 審判によって 0.1 の加点を与える。

Dスコアについて

- ・手放し技を片手で持った場合は、最終的に両手で持った時点か、他の技が明確に開始された場合に難度を認定する。
- ・ヤマワキにおいて、明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施は B 難度(ボローニン、後ろ振り上がり上向きとび越し懸垂)として判定する。
- ・伸身トカチェフは明らかな腰のまがり(90°)が見えた場合 C 難度(屈身トカチェフ)とする。
- ・後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下りにおいて、全経過大きく腰をまげた実施は屈身として判定する。

Eスコアについて

- ・手放し技や終末技の前の車輪での膝まがり実施減点の対象となる。
- ・後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂は、後半の後ろ振り出しの局面で、腕と上半身の角度が 45 度に満たない場合は実施減点の対象となる。
- ・振動倒立(経過)技、ひねりから(片)大逆手になる技は角度の逸脱の減点を受ける。

2. 競技会での技の実施や認定に関する事項

- ・ヤマワキは、上昇の仕方、腰のまがり具合、ひねりの度合いを総合的に判断した。明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施はボローニン(B 難度)と判定した。
- ・手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは実施減点とした。
- ・車輪での単純な横への手のずらしは実施減点とした。
- ・ひねりを伴う技はひねり終わってバーを握った時点の角度で判断した。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会は、全体として丁寧に捌き減点を少なくしようという演技が多く見られた。角度で減点されやすいグループⅢの技で難度を落とし確実に倒立位で捌き E スコアを上げようという選手とコーチの考えが見えた。その一方で D スコアが全体的に低い印象を受けた。予選の競技、決勝の競技の中で決定点を 14 点台に乗せた選手は 2 名ずつであった。

E スコアについては、美しく丁寧な演技を意識している選手と、技を実施することで精一杯の選手との差が大きかった。手放し技や終末技前の車輪での膝まがり、手放し技後の車輪での肘まがり、倒立位を経過する技やひねりを伴う振動技での角度等だけでなく、シュタルダーやアドラー開始時において、つま先や膝のまがりの目立つ選手が非常に多かった。角度に対する減点に注意が向きがちになるが、つま先・肘・膝等、日々の「美しい体操」に対する意識の積み重ねが、美しさ・雄大さ・力強さを表現する。魅了する技捌きまで昇華することを期待する。そのような体操を行いながら、高難度技を取り入れ D スコアを高めていってもらいたい。